

データと紙の間で - Nineteenth Century Collections Online -

よこやま ちあき
横山 千晶

(法学部教授・日吉メディアセンター所長)

日吉メディアセンターの仕事にかかわるようになってから、ますます身に染みて感謝するようになったのは、図書館の所有する文献の充実ぶりである。慶應義塾の宝と言ってよいだろう。図書館があるからこそ、充実した教育が可能になるし、研究成果を世に出すことができる。

1980年代初頭、大学院の修士課程に入ってから、駆け出しの英文学者がとにかく手元に置きたかったのは、オクスフォード英語辞典(OED)だった。私は現在文学部の教授でいらっしゃる松田隆美先生から1セット譲っていただいたのだが、書棚いっぱいには並んだOEDを見ると、それだけで半人前の研究者になった気分がした。とはいえ、1992年にOEDはCD-ROM化され、2000年にはオンライン版が世に出ることになった。大学院時代に古英語や中英語を理解するためにOEDには本当にお世話になった。しかし、研究室の引っ越しのときに、紙のOEDは泣く泣く処分することになった。

今やOEDは私の座右の書、ではなく、右手クリックのデイリー・パートナーである。現在他大学の先生方との共同で、シェイクスピアの新訳を出版するプロジェクトに加えていただいているが、オンライン版になったおかげで、どれほどシェイクスピアの世界が身近になっていることか。現在OEDは3か月ごとにアップデートされている。言葉同様、辞書もまた生きているのである。大きなOEDの巻のページを必死になって繰りながら、細かな字を追っていたころが、はるか遠い昔に思える。

とはいえ、このOEDのオンライン版をすべての大学図書館が契約して入れているわけではない。異なる機関に所属していると、それぞれの機関の違いに気づかされて、時として隣の芝生が青く見えるものだが、こと図書館に関しては、私は慶應義塾の芝生はかなり青い、と確信している。紙媒体の資料のみならず、なんといっても契約しているデータベースの充実ぶりにはただ驚かされる。日吉メディアセンターの所長になってから、どれほどの費用がそこに

投入されているのかを知って、感謝の念を新たにしている。しかし、ここに問題がある。「辞書は生きている」と語ったばかりだが、生き物である限り、契約したら我々の役目は使うだけでは終わらない。読者もまた一緒になって育てていくし、そのための費用も必要になる。昨今の大学図書館の使命は、資料を購入・整理し、使用者に提供し、使い勝手をよくするだけではなくなくなった。その役割はあまりに多岐にわたるが、その一つはどうやってこのデータベースを維持していくのか、ということである。

そのことを肝に銘じつつ図書館の所蔵する宝を存分に使いこなし、成果を生み出すことは、研究者の使命だろう。特になかなか手に入らなかった資料が手に入った時はなおさらその使命を実感する。2019年の2月にメディアセンターが契約したNineteenth Century Collections Online(NCCO)はそんなデータベースの一つである。

慶應義塾のメディアセンターではすでに初期巻本のデジタル画像と全文の検索ができるEEBO(Early English Books Online)、および18世紀の文献と本文を検索できるECCO(Eighteenth Century Collections Online)のデータベースを契約しており、これらのデータベースは原資料のデジタルデータへのアクセスと横断検索を可能にし、慶應義塾での研究環境を大いに改善してきた。これに加えて19世紀の膨大な資料へのアクセスを可能にするNCCOの契約は長く待たれたことだった。筆者の専門はヴィクトリア朝である。産業革命を経て帝国主義に突入し、まさにグローバル社会が現実となったこの19世紀は、イギリスのみならず世界の価値観が大きく揺らぎ、互いに影響を与え合った時代であり、一つの文化や領域だけに視点を限定してしまうと、より大きな知のネットワークは見えなくなってしまう。そのためにも何度か日吉と三田の両キャンパスの教員たちで大型の助成金を獲得して、NCCOの契約にこぎつけようと試みたものの、うまくいかずあきらめていたところ、なんと三田メディアセンター選書担当課長の

杉山良子氏から、発売元から特別価格提案があった、今がチャンスかもしれない、と声をかけていただいたのである。2018年の11月半ばのことである。すぐに経済学部不破有理先生と文学部徳永聡子先生に声をかけ、ECCOの契約の時と同じく、賛同者を募ることになった。署名リストを作成して声をかけたところ、研究の時代や領域を越えて、そして学生と教職員の立場の違いを越えて、100以上の署名が集まった。こうして2019年2月、購入の提案を受けてから3か月という速さでNCCOの扉が開かれた。

NCCOは100に及ぶ世界の図書館やアーカイブとの提携によって可能となった資料群を提供しており、時代も19世紀前後と幅を取っている。資料も書籍、新聞、定期刊行物、パンフレットに限らず、日記や書簡、地図、楽譜までそろえ、写真のデータベースも豊富である。提供されている資料は100種類以上に及ぶ。現在12の領域に分かれるアーカイブは、以下のとおりである。

- 1 アジアと西洋：外交と文化交流
- 2 英国の政治と社会
- 3 イギリスの劇場・音楽・文学：ハイカルチャー・大衆文化
- 4 児童文学と幼少期
- 5 ヨーロッパ・アフリカ：商業・キリスト教・文明・征服
- 6 ヨーロッパ文学 1790-1840：コルヴァイ・コレクション
- 7 世界の地図化：地図と旅行文学
- 8 写真：レンズを通して見る世界
- 9 宗教・社会・霊性・改革
- 10 科学・技術・医学 1780-1925
- 11 科学・技術・医学 1780-1925, Part II
- 12 女性：国境を越えたネットワーク



図1 Nineteenth Century Collections Online
<https://auth.lib.keio.ac.jp/db/?key=ncco>
 (学内者のみアクセス可)

ホームページ(図1)に入ると、これら12領域のアイコンからそれぞれのアーカイブに入ることができるのみならず、コレクション元から資料の検索もできるようになっている。異なる領域の中での横断検索が可能になるだけでなく、領域ごとの資料数が提示される。今回特にありがたいのは、手書きの書簡に関しても差出人・受取人・差出地を索引化してくれていることである。ユーザーアカウントを使えば資料、タグや注釈の保存や編集も可能なので、データの保存と整理を各自で行うことができる。

もちろん教育に対する目配りも行き届いている。Term Clusters機能を使えば、自分の検索したキーワードがどのようなトピックの中で議論されているのかが、視覚的に(円グラフかタイルグラフかを選ぶ)分かるようになっている。つまり、キーワードをめぐる議論の広がりをもその目で確かめることができるのだ。並行してそれらの議論の資料にアクセスできる仕組みになっている。

繰り返しになるが、データベースは使ってこそ生きてくる。だからこそ慶應義塾が契約しているデータベースをどうやって有効に使っていくのか、そのための維持を費用も含めてどのように行っていくのかは、研究者自身が考えるべき大きな課題である。

同時に「資料」の意味を私たちは今一度考える必要がある。データの資料と実際の資料は別物である。データベースで調査した後、資料の実物に直面することで、研究は体感に裏打ちされた強い説得力を持つ。またデータベースはこの世界にあるすべての資料を網羅しているわけではない。見つけられるのを待っている資料は、いまだ山のようにある。

ここ数年私は研究のためにロンドン・メトロポリタン・アーカイブズに通っているが、レターヘッドを手に取り、書簡の筆跡を目で追ひ、大部の記録帳の古びたページを繰ることは、書いた人に寄り添い、書かれたときに身を置く体感となる。この醍醐味がないと研究はむなし。同時に、実物と対面することは、資料を守り続けてきた人々に思いをいたすことでもある。コンピュータによるデータベースは必ず読めなくなる時が来るという。結局最後まで残るのは、物質としての紙の資料である。

研究者であるということは、紙とペン・筆・鉛筆の世界と画面上のデータの世界との間を何度も行き来し続ける、ということなのだろう。